

母の愛に生きた「漢(おとこ)」

(二テサロ二ケ二・五く八)

母の日は『教会発』の記念日だ。一九〇七年五月一二日、A. ジャービスという女性が亡き母親を偲んで教会で記念会を持ち、白いカーネーションを贈ったことがきっかけとなり、それに感動した人々が翌年から教会の中で母の日を祝うようになったという、教会の「良き伝統」である。

「母ありてこそ我あり(サトウハチロー)」、また「子どもに対する母の愛は、もつとも利己心のない愛である(芥川龍之介)」と言われるとおり、全ての人とつて母の存在は偉大でありその愛はまた人間世界にある愛の中で最も美しいものだと言っても過言ではない。今朝の聖書箇所においてパウロは自らのテサロ二ケ教会との関わりを母のごときものだと言っている。以下母の愛のかたちについて三つのことを学びたい。

一、目線を合わせる愛

七節には「、、優しくふるまいました」とあるが、新共同訳聖書では「こ」を「子ども」のようになりました」と訳出してい

る。ここは本文の確定が難しい箇所だが、後者の線で理解するところでは自分の子を養い育てる際に母親が子どもと同じような言葉でコミュニケーションをすることを指していると言えよう。確かに母親は子どもと接するときには「こども」になる。こどもと同じ目線で、幼児語で語りかけて世話をするのだ。またその時の母親は盲目的でもある。他者の視線など一顧だにしない。只々赤ん坊の如くなつて接するのである。父親だとかうはいかない。恥の意識が邪魔をするのだ。しかしパウロはテサロ二ケ教会の兄弟姉妹たちのために母のごとくなつた。権威を振りかざして上から目線で接するのではなく、霊的に幼いテサロ二ケの信徒たちと目線を合わせ、共感し、優しく振舞つたのである。

二、労を厭わない愛

続く九節においてパウロはテサロ二ケの信徒たちに自らの宣教活動の労苦と苦闘を述べているのだが、この労苦はリアルなものであった。というのもパウロは本来福音伝道者としてその働きによつて禄を食むことを権利として持つていたにも関わらず、却つて教会の状況を考え、働きながら宣教活動に従事することを選択したからである。愛する子どものためには労を厭わない。これは母の愛だ。埼玉にゆかり

のある窪田聡さんの「かあさんの歌」の背景には進路を巡つての母子の確執があつたという。母の反対を押し切つて故郷を遠く離れた不肖の息子を母は慕い、夜なべして手袋を編む。寒い冬の夜、一切の家事を終えてから囲炉裏端で黙々手袋を編む母の姿を思い浮かべると私たちはそこに母の愛を見る。パウロは自らの伝道をそのようなものにとらえ、他の偽教師たちの巧言令色とは一線を画するものと喝破しているのだ。

三、いのちがけの愛

テサロ二ケの信徒に対するパウロの関わり方はこのように情緒的であつた。しかしその情熱は説教壇の上から聴衆をアジテートするだけのものではなかつた。彼の宣教はむしろみことばだけではなく、いのちをやり取りするような血の通つた宣教であり(八節)、信徒の成長のためならいのちを投げ出してもかまわないという一途なものだつた。この命がけの愛、自己犠牲の愛は確かに母の愛に通じる。

今から四年前にグアムで起こつた通り魔事件を覚えておられる方はいるだろうか。被害者のひとり、弟の結婚式のため一家でグアムに来ていた杉山理恵さんは文字通り身を挺して三歳の子どもを守り、自らは執拗に刺されて落命したという。文

字通り、命がけの愛である。パウロの教会に対する愛はそのような愛であり、実際に彼は伝道の果てに殉教したと伝えられている。

* * *

だが一つ腑に落ちないことがある。それ母の如く愛したと豪語するパウロは誇り高き独身男性であつたこと。何故彼は母の愛を發揮できたのだろう。そのわけは彼が母の愛、いやすべて真実な愛の源泉である神の愛のうちに留まり、生きていたからとしか説明できない。先週、昨年一月に狭山で起こつた三歳女児虐待死事件の初公判があつたが、「帰つたら(虐待を)やろうね」や「犬みたいにつないじゃえばいいじゃん」という文字の踊るLINEを見ると「生物学的な母」良き母ではないことは火を見るより明らかだ。では母が真の母の愛に生きるためにはどうすればいいのか。答えはやはり神の愛を知ること尽きる。重ねて言いたい。今日は母の愛に感謝する日であるが、教会で語られるべき母の日のメッセージはそこで終わるべきではない。この母の日、もう一度愛の源泉である十字架を見あげよう。そこには共感、労苦、自己犠牲という愛の特質の全てが表わされているのだから。アーメン。